

Title	「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば：その2陳衡哲(2)
Sub Title	Overseas-educated Chinese women in early 20th century and their discourse : Part II : Sophia H. Chen (2)
Author	櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.4 (2011.) ,p.169(24)- 192(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	竹内良雄教授退休記念号 研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20110331-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば —— その 2 陳衡哲（2）

櫻庭 ゆ み 子

1917年6月、陳衡哲は『留美学生季報』に「半文半白」の小説「一日」⁽¹⁾を発表する。中国近代小説の始まりとされる魯迅の「狂人日記」の発表よりおよそ11ヶ月早かった⁽²⁾。

この短編は当時陳衡哲が在籍していたアメリカ東部の名門ヴァッサー女子大の学生達の日を描写してスケッチ風に綴ったものである。

今一部訳出してみるが、始まりは「一日」の題名通り起床の鐘の音からである。

ボン！ボン！ボン！ボン！七時の時が告げられた。

アンナはベッドであくびをした。（“欠伸説”）「ベッティ、今のは何時」
ベッティがぼんやりしながら聞く。（“模糊說道”）「ねえ、鐘が鳴ったの
聞こえたの？」

アンナはぐっすり寝てしまい答えない。（“不答”）

ベッティも眠ってしまう。（“亦睡去”）

ボーン！七時半の鐘が鳴った。

ベッティもアンナもまだ目覚めない。時計は7時50分を指している。

（“鐘指七下五十分”）

アンナがぎょっとしたように起きる。（時計を見る）「わあ、あと十分しかない」

ベッドから飛び起きるとベッティをゆすっていった。「早く起きて。朝食の鐘が鳴ってずいぶんになるわ」

ベッティは答えない。壁に向かって体の向きを変え寝てしまう。

アンナはあわてて身支度をするとう階下に駆け下りていく。食堂では給仕がドアを閉めるところで、アンナは滑り込む。

アンナが一つのテーブルに行くと、そこにはすでに七、八人が座っていた。アンナは席につくと「まだ何か食べ物はある」と尋ねた。

マギー：「きっと誰かが遅れてくるだろうってわかっていたから、ここに一人分多めに頼んでおいたわ。さあ、召し上がれ（“現在請你享用”）」別の学生にむかって「それで、どの後どうなったの？」

アンナ：「まあ、ジェニス、またニュースを仕入れたの。最初から教えてくれる？」

ジェニス：「いいわよ。昨晚……」

現代中国語の会話表現と異なる部分を（“”）で示したが、こういった細かい部分を除けば「一日」はほぼ白話文で書かれていると言って差し支えない。話はこの後、ジェニスによって、一人の新入生が友達を寄宿舎に呼び込んだ顛末が語られる。会話が多用され、読み手は女子学生達の会話の中から事のあらまし、彼女たちの大学生活の状況を読み取る形になっている。こういった会話形式で綴られるあり方を陳平原は「話劇の手法を借りている」⁽³⁾と表現したが、確かに、地の文は極端に少なく、時間で区切られる場面ごとに女子学生達の直接会話で話は進む。上記で拙訳の、地の部分を「た」ではなく動作の継続状況を示す「する」、「る」で統一したとすれば、小説よりは脚本のような印象を与えるだろう。

もう一箇所、授業を終えて部屋に戻ったマギーと、尋ねてきた落第寸前のベティが話す場面を訳出しておこう。

時計の針は四時五十分を指している。マギーは部屋に戻り鞆をベッドに放り投げると言った。「ありがたいこと、今日も無事すんだ」

ノックの音が聞こえる。

マギー：「どうぞ」

ベティが入ってくる：「マギー、何かおやつない？ お腹が空いて死にそう」

マギーが笑った。：「またおねだりに来た。リングでもいい？ それともオレンジ？」

ベティ：「両方頂戴」

ベティは食べながら言った。「マギー、大学の生活って本当にしんどいと思う。今日ママからの手紙を受け取ったけど、家でまたダンスパーテ

ィを開くんですって。マギー、家ではみんなあんなに楽しんでいるのに、私の方はここで寒さと飢えて死にそうなのよ。不公平じゃない？」

マギー：「そうよね。昨晚私も上級生に言ったの『勉強してなんのいいことがあるの』って。彼女はね『今大学に入ったばかりだから、授業が厳しくて、つらいと思うのは当たり前。だんだん勉強の楽しさがわかってくるわ』と答えてから厳しい顔して言ったのよ『マギー、チャンスが与えられたのにそれをちゃんと使わないのは本当にもったいないわよ。ここに來た中国人の学生を見た？ 故郷を離れ国を離れてここまでやってきたのは、一体何のため？』私が答えて……

ベティ：「ごめんね、話をさえぎって。（“請你恕我打斷你的說話”）でも、本当に理解できない。家を出て外国まで行って勉強するなんて。私には絶対できないわ」

マギー：「それだけじゃなくて、彼女たちは夏も帰れないのよ」

ベティはベッドにひっくり返る：「うわお！」

この「一日」という陳衡哲の初めての文芸創作は文字通りほぼ事実に基づいて実際の生活を描いたといつてよい。アメリカの女子大学新入生の寄宿生活のほかに話の発展があるわけではないため「小説とすら言い難い」⁽⁴⁾とも評された。陳衡哲自身は「内心の衝動の結果に過ぎない」⁽⁵⁾と述べているが、彼女の言うように情感が誠実に「描写」され且つ社会的背景に目を向けさせようとする書き手の意図もきちんと書き込まれている。例えばこの場面で語られている中国人の留学生は、暗に陳衡哲とその学友の二人を示している。陳衡哲らはヴァッサー女子大がはじめて受け入れた中国人留学生であり⁽⁶⁾、それらしき二人に言及したのも、祖国に報いるために苦勞をものともせず勉強に励む中国人学生と、アメリカ中上流階層のやや甘やかされた女子学生たちの比較を示し、中国の置かれた状況を語りの中からくみ取るようにしむけたと見てもいい。読み手の方向性がきちんと定められた文章なのである。

確かに陳平原の言うように、五四時期文学運動初期の段階に位置づけられる陳衡哲の手法は、魯迅のそれに比べてまだ稚拙であり、話劇の手法を借りたともいえる会話体は、後の近代小説を発展させる方式としては「発展の可能性は低い」と言えるかも知れない。ただ仮にそうだとすると、私が考えてみたいのは会話体を使用したことの意味である。

胡適は1928年4月出版の陳衡哲小説集『小雨点』に寄せた序⁽⁷⁾で、「私たちがまだ新文学の問題について議論していた時、莎菲（陳衡哲のこと一筆者注）は既に白話で文学を始めていた。「一日」がすなわち文学革命が討論されていた当初の最も早い時期の作品である。「小雨点」も『新青年』時期の早期の創作の一つである。民国6年以降、莎菲は多くの白話詩も作っている。当時の新文学運動の状況や、魯迅先生の最初の作品―「狂人日記」が発表された時期、そして当時意識して白話の文学作品を書いたものがいかに少なかったかを考えてみれば、新文学運動史上における莎菲のこの数編の小説の地位がわかるだろう。」と述べている。

まず、陳衡哲は『小雨点』に付した自序で、作品は「内心の衝動の結果」と言っている。あたかも衝動に動かされたままに自由に書いたように見える。しかし官僚一家の娘として教育された陳衡哲は、伝統的知識人についてまわる社会的責任に十分自覚的である。公にする文章を感情の赴くままに記すロマンチズムの時代はまだ来っていない。そして、1917年当初、彼女の書き言葉はまだ主に文言文だった。だからそれを白話文に変えていくには、胡適の言及するように、書くことに対する姿勢と技巧で大きな飛躍が行われているのである。

人物を対象に描く際、動作や直接会話の再現によって喚起されるイメージが時に理屈を述べるより人を考えさせる。このようにイメージが意味の伝達に重要であることは、画家であった母親が描く姿を幼いころから見ていた⁽⁸⁾陳衡哲には実感として受け止められる、ごく自然な他者への理解の道筋だったと思われる。ただ、動作や登場人物の発する言葉の具体的な提示によって生き生きとした表現を作り出すというのなら、清末の通俗小説の書き手や、当時庶民に広く受け入れられていた語り物の講釈師も行ってきたことである。陳衡哲の新しさは、エリートでありながら、その言葉であった詩文に固執せず、イメージの喚起は文言文のリズム、音、によって導き出されるのではないし、べきでもない、とした点である。同じ留学仲間の胡適と後に夫となる任鴻雋らが、詩文の白話化を巡って激しい論議を交わしていたのを傍らで見ながら、彼女はイメージと意味の関係を模索していたに違いない。胡適が「文学改良芻議」を掲載して文学革命を打ち出したのは1917年『新青年』一月号だが、呼応するようにわずか半年後にほぼ白話化した文章で「一日」を執筆できたのは、彼女自身の問題意識と彼女独自の試みの時期が前段階にあったからである。

周知のように、民国教育部が教育改革に乗り出し、小学校の教科書を文言文から白話体に変更しはじめるのは1920年代である⁽⁹⁾。『新青年』が全面的に白話の文体を掲載するのは鲁迅の「狂人日記」が発表される直前の1917年以降だった。「一日」が発表された『留美学生季報』では、この時期掲載された文章のほとんどは文言文だった。1917年当時は、知識人が何かを言おうとするときに書かれる言葉は文言文が多勢である。文言文において書く側は格調高い文体となるように工夫を凝らし、読む側もその文体に慣れ意図をくみ取り得る。文言文はいわばエリート内で通用する言葉だった。

国を代表する留学生として選ばれ啓蒙の使命を負ったと自負する陳衡哲が漠然と対象としていた読み手は、清末から着手された近代的な教育に向けての制度改革⁽¹⁰⁾によって識字能力を高めつつあった、主に都市部を中心とする人々だったと言える。そういった人々のうち、格調高い文言文をイメージも含めて受け止めて理解する層はまだ少数派だった。だからこそより効果的に訴えかける手段としての文字は、文言文に取って代わる何かでなくてはならなかった。ところが陳衡哲自身は、地の文で綴っていけば、彼女が信奉していた梁啓超の「新民体」にどうしても引きずられ、ひいては講談調か大上段に構えた演説調になってしまいかねなかった⁽¹¹⁾。そこで、目の前で行われた英語の会話を一つ一つ頭の中で中国語に翻訳して書き付けてみる、という作業を通じて、文言文体ではない言葉を使つてのイメージの喚起を行おうとした。これが「一日」である。そこでは陳平原の言うように話劇の手法を借りたかも知れない。そのヒントをどこから得たにせよ、まずは会話の再現、ということが大切だったのだ。

だから彼女の初期の小説を見ると、舞台は外国か、あるいは童話の世界であり、現実の中国という設定はない⁽¹²⁾。つまり、おそらくは英語での会話のシチュエーション、あるいは、英語圏の文化環境に於いて発話される状況、よく読まれる童話の世界、をイメージしながら中国語を組み立てていった。そこでは、彼女が身を置いた英語圏での人々との会話のやりとりが経験知となっていたとも考えられるのではないか。

先の考察で触れたように⁽¹³⁾、陳衡哲は、清国教育部が最初に派遣した義和団事変賠償金女子留学生十人の中の一人⁽¹⁴⁾である。彼女はヴァッサー女子大で四年間学んだ後に成績優秀者として奨学金を得、シカゴ大学院で引き続き西洋史を専攻、修士論文「古代から中世における中国と西洋の交流

史」⁽¹⁵⁾を1920年5月にシカゴ大学に提出して修士号を得た。そして胡適によって、近代教育制度の充実に向けて組織改革を行っていた当時の大学総長蔡元培に推薦されて北京大学に迎えられ、大学創設以来初めての女性教授として西洋史を担当する。その後、教育部で役職に就いた夫の任鴻雋と共に若い世代の啓蒙と教育に尽力することになる。陳衡哲は十代から二十代前半にかけて医学を学んでいる⁽¹⁶⁾。その体験も関与しているのだろうが、夫と共に「科学」の普及のために基盤となる機関の設立に尽力し、特に女性の思想的啓蒙を行い、近代的思考形式、物事のとらえ方を伝授しようと啓蒙的発言を行っていく。そういった彼女は文学を、メッセージを伝えるための利用価値の高い媒体ととらえた。その創作の目的は「自分で表現できない無数の人々」⁽¹⁷⁾のために「彼らに代わって語ること」だったのであり、それゆえレトリック、技巧にはより意識的だったといえる⁽¹⁸⁾。

彼女は、夫の任鴻雋と同じく、欧米近代におけるひとつの見方、すなわち科学的、分析的視点を身につけていたといえる。客観的に他者を捉える視点の獲得とは、言葉を変えれば主体としての自らの存在をしっかりとつかんでいたということである。彼女にとっては、小説はいわばこういった自己を表現する手段のひとつにすぎなかった。個々の存在を主張して示そうとする際も、決して、対象化して分析しようとする観察者の視点は失わない。理性によるコントロールを強く効かせ、のちの丁玲、白薇、廬隱、蘇雪林ら五四時期の女性作家たちの多くが、女性の解放を求めて一人称の語りで心情を吐露するといったロマンチズムに、彼女は流れることはなかった。つまり一人称独白文体を彼女は使うことはしなかった。「個の叫び」を言うのであれば詩に託して、“意象”（イメージ）を伝えればよかったのだ。先走って言えば、異文化接触を体験している陳衡哲は、コミュニケーションにおける相互理解の「誤解」または他者の理解の「のりしろ」を許容し得る言葉というものの性質をよくわかっていたといえる。

常に主体と客体を対峙させて意識をコントロールする理性の勝った陳衡哲ではあるが、ただ彼女は、新しい思想を新しい言葉で、という精神に則って書く姿勢を貫いたという点で「五四時期文化運動を代表する作家」⁽¹⁹⁾だった、ということはあるだろう。このことを前提としたうえで、繰り返すが、なおかつ私が考えてみたいのは、この会話を多用することの意味である。

まず彼女の著作活動をもう少し丁寧に振り返って見よう。

陳衡哲年自伝によると、陳衡哲は留学に向かう以前、親戚の家で家庭教師をしていた時点から独学で英文学作品の翻訳を行っている。現段階で見られる最初に雑誌に発表された作品は、1912年に暦についての論文を文言文で翻訳したものである⁽²⁰⁾。それから、留学試験に合格し、渡米後 Putnam 校で英語研修を受けた後にヴァッサー女子大に入学、西洋史と英米文学を学び始めた頃、『留美学生季報』に、弟を亡くした友人に宛てた手紙という形で、「ある女性への手紙」（原題 “至某女士書”）を文言文で発表する。それから任鴻雋を感動させ、二人の出会いのきっかけともなった「リヨン女史小伝」を『留美学生季報』によせる⁽²¹⁾。自ら大いに影響されたという梁啓超の「罗兰夫人」⁽²²⁾ばりの格調高い文言文での伝記紹介だが、実はこれは英文で書かれたリヨン女史の評伝を抄訳紹介したものだった。前書きには「友人の丁美英に中国語に訳して国の皆に紹介して欲しいと頼まれた」という言葉がある。当時は原書を読めてもその原文にふさわしい格調で文言文に翻訳のできる者は少なかったのだろう。少女時代から梁啓超の文体に触れ、読み込み、「新民叢書」で紹介される女性の英雄の形象に感銘した陳衡哲は、読み手を高揚させ感銘を与える文体を丸ごと吸収している。身体になじんだ文言文のリズムで翻訳することはそう難しいことではなかっただろう。

その後彼女は厳しい授業で知られるヴァッサー女子大で⁽²³⁾学業にいそしむ中「ヴァッサー女子大」紹介を文言文で発表する。半年後には、今度はバートランド・ラッセルの反戦論評 “Is Permanent Peace Possible?” をこれまた格調高い文言文で抄訳したうえで更に自分の意見を加えてた翻訳紹介「永久之和平果可期乎」を同じく《留美学生季刊》に掲載し、中国人に覚醒を呼びかける。その後今度はヴァッサー女子大の紀要に英文で中国の詩を紹介した文章をよせ、これが好評を博したことから、アメリカ人の学生や教師たちに中国詩を語る活動を大学内部で行いつつ中国人留学生の活動にも積極的に参加し、アメリカ東部学生会の中国語部門の書記となる。第12回学生大会では会の運営に当たり同時に中国語部門での弁論大会に出場する。

これが1911年から「一日」が書かれる直前まで、著述を中心に見た陳衡哲の状況である。文言的表現の混じった白話文「半文半白」の「一日」が発表される前段階として、英文から中国語の文言文への翻訳や、また口頭や文章での中国語から英語への翻訳という作業がかなり行われていたことがわかる。

ところで、ラッセルが第一次世界大戦中に *The Atrantic* に発表した “Is a permanent peace possible ?”⁽²⁴⁾だが、これは戦争の勝利が永続的な平和をも

たらずのか、という問題提起をもとに、平和と考えられているものの実態を分析し、永続的な平和のために提言を行った雑誌9頁にわたるかなり長い論評である。陳衡哲は、題名こそ「永久之和平果可期乎？」と忠実に訳したものの、「節約『大西洋月報』路式君（ラッセルのこと一筆者注）原著」と但し書きをつけて中国語の雑誌頁で3頁と大きく省略して意識し、その後に倍以上の頁をさいて、ラッセルとはやや異なった視点から平和について論じている。そこで彼女は「一般大衆の文化的レベルを引き上げることが戦争を続行するよりも重要」というラッセルの意見に対し、中国の国情を見た場合紛争を時には武力で解決する国際機構の設立は大切ではあるが、中国の国民は強国に守ってもらうという幻想の前で旧態然として怠惰な生活におぼれていれば自滅する、と自国民への警告を発し、また「戦争推進に力を貸す軍人」でも人間性を抹殺した殺戮戦に変質している20世紀の戦争の悲惨さを訴える者はおり、そこに平和への希望を見るべきだ、と主張している。彼女の記述のスタイルは、自分の意見をそのまま述べるというよりは、たとえばヴァッサー女子大学長の意見とダーダネルス海戦を体験した英国軍人の生々しい体験記を翻訳紹介するという形で引用を十分に活用して読み手に考えさせるというものである。

このラッセルの論評紹介の三ヶ月前にヴァッサー女子大の紹介⁽²⁵⁾も行っているが、これも地理的歴史的な平板な紹介というよりは、今日、つまり彼女が在籍していた当時の1915年当時、例えば1915年の設立50周年に行われたギリシャ演劇⁽²⁶⁾やまた他の学校との比較など、陳自らが見聞きした状況紹介を交えながら生き生きとした見聞録を披露している。前述したが、彼女の名を任鴻雋に知らしめた、名門マウント・ホリヨーク女子大設立者リヨン女史の紹介も、他人が書いた評伝の紹介である。つまり彼女は著述を発表し始めた当初は、全て自分が見聞いたことや、ある事実に基づく紹介を行っており、虚構性の強い作品を創作してはいない。「また聞き」にしろ他人の言の紹介にしろ、相手の言の模写・模倣によって自分の意見を悟らせるものである。陳衡哲にとって、対象とする文章の口調を捉え伝えることが意味内容の伝達と同等に大切なのである。

繰り返すが、陳衡哲は、政治に常に関わっていくことを求められる中国伝統的文人官僚の家に生まれている。そして、梁啓超によって紹介されたジャンヌダルクやロラン夫人に一度はあこがれ、「お国のために」を常に念頭に置く伝統的読書人の精神を受け継いだエリートである。遅れた中国の状況、

国際的に弱者である生まれたばかりの共和国、中国を何とか欧米並みの近代国家にしたいと願う啓蒙家としての自負がある。その彼女が胡適の提唱した白話文の推進に共感したのも、陳衡哲にとって、言わんとすることを的確に表現し、かつ識字レベルがやや低い者でもわかる文体は、特権階層の言葉であった文言文に代わる新たな文体でなくてはならなかったからである。

そして、胡適が白話文体を書き出すに当たって、英文への、又は英文からの翻訳をも含めて色々工夫したように⁽²⁷⁾、陳衡哲も文言文での紹介ではなくより人々に読みやすい口語体で記述するための模索があった。近代の知を伝える翻訳文を口語体で書けば、新たな知識を得たいと願うより多くの人々が読めるようになると考えたわけである。

言うまでもなく書き言葉と話し言葉は所詮違った次元のことばで、それぞれに異なった言語コードに従っている。朱自清が30年代に述べているように、文言文を書き言葉の主立った手法とする知識人は、白話文への移行過程でまずは文章語を語りかけの言葉に直すのに一苦労した。普段使う日常会話とは違ったレベルでの話し言葉の書き言葉を創造しなくてはならなかったからである。そこで考えられた文体が演説口調であり、たとえば秋瑾が20世紀初頭に行ったように、朗読を通じて話し言葉の書き言葉が創造されていったという面がある。

朱自清は、こういった演説口調を利用した書き言葉の創造に、1930年代に留学したイギリスでの詩の朗読会が大いに参考になったと述べている⁽²⁸⁾。では陳衡哲の場合はどうか。彼女も朱自清の試みに先立つ1916年時点で、話し言葉的書き言葉の書き起こしを試みていた。1916年9月のアメリカ東部中国人学生大会で催された弁論大会で行った演説をその後草稿として書き起こしたのである。弁論大会が行われた翌年の春、1917年の3月、『留美学生季刊』に演説時の題名もそのままに「和平與争戦」として発表されたのがその草稿である。それは秋瑾の演説草稿以上に非常に口語的な、ほぼ白話文と言っている文だった。

この草稿は、先に自ら翻訳紹介したラッセルの反戦論評を論題のたたき台としたもので、それは彼女の白話文体に向けての一つの転換点を示している。草稿ではまず文言文での前置き「この文章は今年の夏の演説会の原稿である。言っていることは浅く、平和問題の万分の一もカバーするものではない。しかしもしも数人の思慮深い人々のこの問題に対する興味を引き起こすことが

できれば、私のささやかな願いはかなう」と述べた後、語りかけに必要な具体的な話は以下のように述べられていく。

みなさん、今世界のいたるところで戦争が起きており、平和というこの二つの文字を口にするのはとても難しい状況です。この文字を耳にする
とまず消極的な意味と覇気のない様を思い浮かべることと思います。でも
実のところ、真の平和はこのようなものでしょうか。今もし平和の現状を
言うならばまず平和が世に現れた時のある出来事をお話ししなければ
なりません。

キリスト教の旧約聖書では、神が人類を作る以前に多くの動植物を作った
といわれています。そのとき仇敵である地獄の魔王は、神が創造物の
創造に嬉々としているさまを見て大いに腹を立て一人の人間を造り、か
く乱させるために植物や動物の間にそれを送り込みます。これの名前が
「戦争」です。「戦争」が動物や植物のところに来ると、動植物たちはた
ちまちそれまでのどかさや楽しさを失い、争いがみ合います。神は
この「戦争」を追いつめたいと思いましたが、それはすでに動植物たちの
骨の髄まで入りこんでいたためどうしようもありません。神はため息を
つき、家に戻ると一人の女性を造り、世界にとどめてゆっくりと戦争を
追いつめようとしてくれます。この女性が「平和」です。「戦争」と「平
和」は永遠にまみえることはありません。なぜなら「戦争」は先にこの
世に出てきたおかげでいい場所をとってしまい、平和を締め出すからで
す。けれども「戦争」にも損な部分がありました。「平和」は静かで清
らかな乙女でしたが「戦争」は恐ろしい殺し屋だったため、人々は
「平和」を好んだようだったのです。「戦争」はいろいろ考えうまい考
えを思いつきました。ある日、「平和」が防具準備が間に合わないうちに
背後にまわりそっと仮面を描いたのです。この仮面は瀕死の老婆の顔で、
それを見たら数日間食事がのどを通らないといった代物でした。「戦争」
は絵を描き終えるととても得意になりました。かわいそうに「平和」は
この仮面を背につけてもちっとも気が付かないのです。みなさん
私たちが見ている「平和」はまさにこの瀕死の老婆です。これは戦争が
描いた仮面です。本当の「平和」であらうはずがありません。私たちが
もし「平和」を見ようとするならば彼女の前にまわって見なければな
りません。「平和」の後ろに立っていても永遠に見えないのです。

今私たちはこの瀕死の老婆が真の「平和」ではないことがわかりました。
ではもう少しお話しします。

ここまでのところでは、自ら半年前に文言文に翻訳したラッセルの反戦論
“Is Permanent Peace Possible?” の内容を参考にしながら「お話」を組み立て
ている。先にラッセルの反戦論を翻訳紹介したときは、格調高い文言文を
駆使するのはそれほど難しいことではなかっただろう。しかし、それをこの
ような換骨奪胎したものとして演説にする草稿として起こすときはまた違っ
た工夫が必要となる。

草稿では、上記に挙げたたとえ話の後さらに了見の狭さのために結局母親
を死なせてしまう孝行息子のたとえ話、シャイクスピアが鹿を盗む話、そし
て焼き豚を得るために家を焼く愚かな父子の話、とたとえが続いた後次のよ
うにまとめ、最後は比喻で締めくくる。

以上、私の浅い話は導入に過ぎません。平和の問題の本論としては全く
不十分です。中立の立場の人がこの話を聞けば恐らく次のように言うで
しょう。「平和の理論はとてもよいものです。でも今世界はその機会が
熟していません。理論がすばらしくても一体なんの役に立ちますか」こ
ういった問いにはこうお答えしておきましょう。世界のその機会とは一
体どのようなもののでしょうか。もし私が平和に賛同するならば私の機会
は来たことにはなりません。もし一人一人が自分の機会だけでもつか
んだならば、それは全世界の機会が出そろったことになりませんか。も
し全世界の機会の到来をまたねばならないのだったら私は、私の機会は
永遠に来ることはない、という言いぐさに賛成します。

みなさん、私たちは今、真夜中の状態にいますと言えます。あたりは真
っ暗です。このとき三つの選択肢が残されています。まずは何も構わず
にただ寝ていること。第二はたいまつをかがげてカラスやネズミを退治
しようとする。三番目は太陽が昇るのを見に高い建物に上ること。
いにしえの人はこのようにしています。「風雨で真っ暗でも時を告げ
る鶏は鳴きやまない」今や風雨があたりを真っ暗闇にしても、恐らくそ
れは東方が明るくなることの先駆けに過ぎないのではないのでしょうか。
もし私たちが暗闇を吹き荒れる風雨を恐れずに世界最高峰に上ったなら
ば、他のことはさておき、朝日が海を照らすその光景を見るだけでも徹

夜する苦勞の甲斐がありはしないでしょうか。

以上の原文では語尾から「者」「也」「矣」「焉」「乎」が消え、「了」「的」「呢」が取って代わる。白話文とっていい文章である。弁論の草稿ということで、拙訳もそれにあったデスマス調で訳してみたが、寓話を巧みに用いながら得てして抽象論に陥りがちな話題を具体化のレベルに下ろし、わかりやすく言わんとする意味を伝え、リズムカルに言葉をたたみかけるように人々を鼓舞させる調子に盛り上げてゆく。事柄を伝えるのに有効な語りかけの白話文体である。こういった演説草稿ができればそれから聴衆ではなくて文字を読む読み手を想定して書かれる論説文に書き直すのはそう難しくないだろう。

一体彼女が口語文に近い文体を試みようとするのは、記号体系である言葉の意味するものをできる限り生き生きと、記号に付随している意味、ニュアンス、“意象”もふくめたところまで伝え、切なる思いを伝えたいがためである。中国の「目覚めぬ人々」に対し目の前の危機に気づかせるために、その危険性を情感を含めてしめしていくことが、彼女の真実の伝え方である。これは、より口語的な表現を使う白話文へ向けて大きく一歩前進することである。図らずも、福澤諭吉の目指した「演説、対話、著述それぞれの行為を通底する共通の文体を創り出すこと」⁽²⁹⁾が実践されている。後の『西洋史』に通じる文体の試みであるといえる。そして、この草稿の三ヶ月後の『留美学生季刊』に「一日」が発表されたわけである。

しかしだからといってこの創作の後からすぐ白話文体に切り替わるわけではない。話し言葉と書き言葉の乖離が大きいために、文言文をよく解しない一般庶民に向けて語ろうとする際は、こちら側、つまりエリートの言語コードから、あちら側、庶民一般大衆の言語コードへの飛躍が必要であり、試行錯誤が繰り返された。例えば同じ号に掲載された第一次世界大戦の従軍回想録の引用を示した「記某軍人之言」は文言文である。そして創刊されたばかりの科学総合雑誌『科学』に掲載した学術紹介文「説行星軌道」⁽³⁰⁾は文言文であり、また一年後『留美学生季刊』で紹介したヴァッサー女子大の大火災での学生たちの見事な対応を紹介した文「記藩薩火災」も文言文である。またこの時期にヴァッサー女子大の紀要に再び英語で『詩経』をはじめとする詩歌の紹介も行っている⁽³¹⁾。それから三ヶ月後の『新青年』1918年9月号

に白話詩としては初めての作品「人家説我癡了瘋」⁽³²⁾を掲載し、続いて白話体小説「老夫婦」⁽³³⁾を執筆するのであるが、これと前後して書かれたと思われる米国東部のアシュカン村に避暑に出かけた旅行記「記大陸之村中生活」⁽³⁴⁾も文言文である。

このように、白話文と文言文を両用しつつ、最終的に彼女は「師とする者もないし、流派もない。文学者の決まりに縛られることはない」（陳衡哲『小雨点』自序）⁽³⁵⁾と自ら語る創作の姿勢を定めていく。そこで陳衡哲が何かを描写するときにモデルとしたのはパターン化した物語ではなく、物語として組み立てられる前の素材そのもの、目の前の現実だった。叙述者（語り手）が主観的な評価をせず、登場人物の心理描写もせずに冷静に人物の言論を記録し、動きを描き、この描写を通じて読者の自分の理解した世界を示す、という分析的視点で、観察したものを腑分けして表現するという書き方を取ったのである。

幼い頃に日常の些事を日常使う言葉で生き生きと伝えようと、方言に漢字の当て字をつけて父親に手紙を書いた経験が、白話文体、すなわちより“意象”に肉薄した言葉を創造する工夫のもととなっているとも言えるだろう。会話体というのは、実際に響く言葉の音を予想させる、イメージ語と受け止めるあり方へより近づいた記述方式である。陳衡哲は、散文体においては「意味されるもの」、「意象」の表出に限りなく近い表現を選んだのである。

例えば上記に言及した「老夫婦」だが、これは「一日」から一年半後に発表された完全な白話の会話体小説である。その始まりを見てみよう。

外の激しい雷雨は次第に収まった。一人のおばあさんが暖炉で服のアイロンがけをしている。彼女の夫がずぶぬれになって外から入ってくる。

おばあさん「ほら、また忘れましね」

おじいさん「何を忘れたかだって」

おばあさん「何を忘れたかですって、ご自分に聞いてみなさいな、知るもんですか」

おじいさん「ああ、思い出した、ケーキのことだろう」

おばあさん「そのほかに何がありますか」

おじいさん「ごらん、両手がいっぱいだろう、どうやって持ち帰るといふかね」

おばあさん「よろしいこと、夕食の時に文句をおっしゃらなければいい

ですよ」

おじいさんはベッドルームに入り、着替える。

話劇の影響かもしれないが二人の動作を観察し、ふさわしい言葉で描き出す、分析的な視点と観察は、書き写すことを意識しての文字通りの「描写」の手法をとっている。このあと五年後に書かれる陳衡哲の最初にして最後の第一人称の小説「吃先生的日記」⁽³⁶⁾も利にさとい主人公、料理人である「吃先生」を距離を置いて対象化し、この人物の目を通じて見た中国社会を動作、会話によって「客観的」に描きだそうとしている。「客観的」への絶対的な信頼は時代性を示すものではある。ただ、先にも述べたように、ここではこういったはっきり自覚された手法をつかったことで、第一人称「私」に託して自らの内面の情を歌いあげる五四時期特有の第一人称小説の「私語り」にはならなかったこと、そういった彼女の在り方はまた、1980年代『幹校六記』の作者、楊絳のエクリチュールにも似た欧米発ヒューマンイズムの伝統を受け継ぐ中国読書人の文体の一つの型であろう、ということを指摘だけしておきたい。

言文一致の文体とは、限りなく話し言葉に近づけた書き言葉の文体、話している現実がそのまま紙面に示されたような錯覚を与え得る文体であり、対象を分析し、腑分けし、文字で分析的に描いていく手法を伴うものである。

陳衡哲がヴァッサー女子大時代に課外活動で中国の古典詩文を英語に口語訳して紹介したこともそうだが、文言詩を英語に直し、それを英語圏の読みに手にわからせるように説明し、その口語体を生かすように説明文を英語で書いた⁽³⁷⁾という経験、「時には要請に応じて中国の詩詞を口頭で訳し彼らに聞かせ（「カナダ露營記」⁽³⁸⁾）というように、異なった言語間を行き来する体験が、文言文→英語口語→中国語白話文、と白話化を行うヒントになったことは胡適の場合と同じである。ただ陳衡哲の場合は逆説的だが、英語口語体の表現をもってしても、それでも中国語の原文のイメージ（中国語で言う“意象”）をつかませることの難しさを実感する中で、逆に、散文の口語的文体の可能性を感じたのではないか、ということも考えられる。対象を分節化し、事細かく具体的に書き記す、限りなく煩雑に説明していく作業をすれば、なんとか伝えられる意味内容は説明しうる。散文においては、心情の開示ではなく意味の効果的な伝達を狙う。陳衡哲にとって、その時散文の言葉が示

す記号内容・イメージは、古典のリズムと漢字の視覚的効果によって成り立つあるパターンをもった世界のそれではなく、科学的視点によって「客観的」に対象化させた世界のそれであるべきだった。この世界を示す言葉は、日常的に話される声により近い表現である書き言葉、白話でなくてはならないのであり、会話体が必要だったのである。

“意象”へのこだわりと文字への疑問、整えられてゆく言葉から漏れていくものへの注目、これは音への敏感な感覚がなせる技である。小説で会話体にこだわったのも、会話においては音を写し取ること、音を写し取ったかのように見せること、が必要だった。

そして、言葉とは音や文字といった「意味するもの」が、“意象”という「意味される内容」と任意に結びついた記号体系なのであり、この記号を使うある「個」を一つの個性としてあらしめるのは、その個特有の結びつきを選び取るところにも示されることを、陳衡哲は感じ取っていたようである。

彼女の言葉は「話す言葉は江蘇なまりに、少し西南官話がまざったもの。だいたい北京語が三割、西南官話が四割、江蘇・上海・母語の常州方言が三割だった。」というし、「福建出身の冰心が滑らかな北京語を話すのに比して、陳衡哲は純粋な北京語を話そうとしない」⁽³⁹⁾という面もあったという。

かつては教職につき、演説の重要性を身をもって示した陳衡哲が、このように母語を固持し話すことばを北京語に変えることはしなかった、というのは、自分の個性である言葉の音を大切に扱い、それをずっと保持しようとしたからである。「晩年は目が不自由になった中で唐詩や古詩を常州なまりで吟じて聞かせてくれた」⁽⁴⁰⁾というように、心情を最もよく伝える音、母語の音にこだわった。

「意味されるもの」は北京語、英語、常州語それぞれで表しうる。その中で陳にとって常州方言の音とそれが示すイメージとの関係こそが言葉を存在の証とする読書人としての彼女の存在を示すものだから捨ててはならないのだ。音・文字とイメージの結びつきは個別であることを認識し、それゆえ他者の結びつきのパターンを尊重する姿勢が、彼女の、「聞いた」ことばにできるだけ近づける書き方にむすびついたのではないか。白話運動の推進者であった陳衡哲自身の書いた文章が、五四時期特有の主義主張の打ち出す調子とは一線を画すものでありえた⁽⁴¹⁾のは、言葉というものを文字ばかりでなく、音、リズム、イントネーションまでを含めた総体として捉えようとした

感受性が、話し言葉の統一という求心的な動きへの警戒心を起こさせたからではないか、ということもいえる。

言葉を、書かれ、目にする文字だけでなく、リズム、間といった総体として捉える彼女の感受性には、すでに言及したように、画家であった母親のもとで描かれる絵を見ていた幼児の体験が影響を与えているかも知れない。そしてまた次のような言語体験も文体の形成に預かったように思う。

一般的には、中国の子供は「千字文」を習得した後に『四書』『五経』の暗誦を始める。女の子は『四書』のみか、それ以下のものしかやらない。ところが、父は全く違うやり方で私の教育を行った。このため、暗証がしやすい『四書』や『五経』、とりわけ私が好きだった流れるようなリズムと詩的情緒豊かな『詩経』を教えずに、まず同義字典である『爾雅』を教えたのである。たとえば、「開始」というこの言葉には十二個の同義語がある詩、また詞によっては二十四個の同義語があるものもある。味もそっけもないうえに難しいこういったものを一日中暗誦しなければならないのだ。……父が私に教えた二番目の書籍はさらにひどかった。父が記録した二千ほどの中国各地の地名だったのだ。三冊目は父の歴史に関して書き付けたものだった。その中には中国歴代の君主の称号と統治した年代があった。父はこの二冊は地理と歴史の基礎だと説明し、知識人として私が獲得でき得る地位を得たならば、それらは必須のものだというのだった。……両親は私を医者にすることに決め、学ぶのに適当な医学書を数冊叔父に選んでもらった。ところが叔父が選んだのはなんと八冊本の『黄帝内径』だった。この書籍は二千年前の漢代に書かれ、その内容は古代の黄帝と侍医の会話を編集したものだった。両親はこの八巻すべてを暗記させようとしたのだ。難しく、無味乾燥なものだったが、それでも地誌と歴史の筆記帳を暗記させられた後では、これらを学ぶことなど陰しく石ころだらけの山道を登った後で平らな平原を歩くようなものだった⁽⁴²⁾。

言葉の意味は文が組み立てられるときにも問題になってくる。白話の文体が揺れていた当時、意味するものを伝えるために問題となるのは、語彙以上に文の組み立てかたなのである。単語であれば置き換えはきく。胡適が白話

詩文の実践で苦しんでいたときに、陳衡哲が試行段階はあったものの短期間で「一日」を描いて見せることができたのは、文言文の「文」の拘束が少なかったことでより自由に「描写」の際の言葉を組み立てられたからではないだろうか。彼女は、対象を描写する際に小説であれば会話体で、論述文であれば聞き書き又はエピソードの多用で示していった。胡適と違って、伝統的科挙官僚が受けるべき教育を、彼女は女性だったがために正規に受けていない。さらに、当時女性が自立できる数少ない選択肢の一つだった（もう一つは教師になること）医者にするために両親が強いた独自の勉強によって、胡適が「纏足時代の血なまぐさい臭い」⁽⁴³⁾と唾棄した文言文の「鑄型」の拘束をそれほど受けずに済んだ。そのために彼女はより自由に文を構築してゆく作業を進めることができた。さらにまた単語の組み合わせから得られる“意象”と単語のずれにより敏感に気づくことになったのではないか。白話文の成立過程を考えた時に、やはりここにジェンダーの問題が深くかかわっているのである。

さらに言えば、彼女は、アメリカで演説の経験を積む中で、あるいはまた異文化にある人々との交わりから語りかけることの大切さを学ぶと同時に、そこで常に行われた英語と中国語相互の言葉の行き来を通じて、イメージ、“意象”の音、文字とのずれ、をより強く認識し「革新的な学術的白話文」⁽⁴⁴⁾『西洋史』へとつながる、語りかけるような独自の文体の確立へと向かったのではないかといえないだろうか。

但し、散文体でイメージ、意象、叙情的な要素の大きい「意味するもの」をどれだけ伝達しうるかについては彼女は最後まで疑問視していた。“意象”と言えばその表出の最たるものは詩という形式であるが、彼女自身が自分の心情を文字化して示そうとするときは旧詩になった。それは最後まで変わらなかった。

中国文学については、任夫妻は胡適に比べてより造詣が深い。唐徳剛教授が「胡適雑憶」で述べたように、胡先生は「白話文」を抱きかかえて「文学一切合財」を概括したが、そのよき友である莎菲（任先生もそうであるが）は、漢魏唐の詩、唐宋及びその後の詞、そして宋の詩までも深い造詣があり研鑽を踏んでいた。」「子供たちにも、唐の詩宋の詞の暗唱を課していた」⁽⁴⁵⁾。

胡適は、理論が先行し実践が伴わないとされながらも、文言文の全面廃止を唱え一気に白話文体へ変更することを主張した。これに対して任鴻雋、そして陳衡哲は詩歌のリズムと、漢字のもつイメージの影響・拘束をより深くわかっており、最もよく心情を吐露する道具としての旧詩は最後まで否定しなかった。北京語が「國語」へと統合される過程で「普通話」制定に向けて求心的に言葉が統一されていく段階では、陳衡哲は方言の音にこだわった。音と「意象」、あるいはイメージまたは「意味されるもの」との関係が、韻文では散文形式とは違ったそれになることを感じ取っていた。そして抒情を詠うときは旧詩で行った。敬愛する夫、任鴻雋が亡くなったとき、陳衡哲の哀悼の言葉は「詞」⁽⁴⁶⁾だった。心の奥深い悲しみを表す際に彼女にとっては、口語調の白話自由詩の分析的ことばではなく、古典のリズムと韻が必要だったのだ。漢字の意味、イメージは、たえそれが現代文の漢字音や語彙の組み合わせだったとしても、旧詩の音とイメージが深くそういった漢字の中に、そしてそれを使用する彼女の身体に刻み込まれていたのである。その意味で陳衡哲は旧——新への過渡期に位置する書き手だったのだが、そこで彼女が示した試みは、今に至る中国語、そして漢字を巡るいくつかの問題を提示している。それを考えようとしたとき、旧詩—新体詩に示される文化の連続性をやはり見落としてはならないのである。

注

- (1) 『留美学生季報』第4巻第2号、1917年6月。
- (2) 藤井省三『魯迅事典』（三省堂、2002年）61頁で、「狂人日記」が掲載された『新青年』は第四巻第五号、1918年5月15日発行となっているが実際の刊行は6月10日以降であり、実際の執筆時間は1918年5月の可能性があることが指摘されている。
- (3) 陳平原『中国小説叙事模式的轉變』第2版（北京大学出版社、2010年）88頁。
- (4) 陳衡哲『小雨点』（新月書店1928年刊行の影印版として上海書店1985年3月発行）に寄せた任鴻雋の序。
- (5) 陳衡哲、前掲書、「自序」。
- (6) 陳衡哲『記藩薩女子大学』『留美学生季報』第3巻第1号、1916年3月。
- (7) 陳衡哲、前掲書、1928年3月21日付「胡序」。
- (8) 以下陳衡哲の自伝を参照。Chen Nan-huaは陳衡哲のペンネーム。
Chen Nan-hua. *Autobiography of A Chinese Young Girl*, Peiping, China: September 1935. シカゴ大学所蔵。以下『自伝』とする。
- (9) 新学制の指標は1922年の「壬戌学制」および1923年発布の小学校語文科目

- 「課程標準綱要」であり、これにより小学校の語文教科書は形式から内容まで大きく変わった。形式から言えば白話文が次第に文言文にとって代わり、言文一致が実現したという。閻莘・張雯主編『民国時期小学語文教科書評介』語文出版社、2009年、「前言」。
- (10) 1904年張之洞らによって公布される「奏定学堂章程」により名実ともに中国に近代学校制度が正式に成立する。阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（福村出版1990年）31頁。
- (11) 例えば「来因女士伝」ではマウント・ホリヨーク創設者リヨン女史の苦難に満ちた生涯をやや誇張した口調で紹介している。
- (12) ただし1923年『努力週報』第42期に掲載した「吃先生的日記」は中国が舞台である。なおこの一人称小説は、抜粋で、かつ続きがあることになっているが続編は見当たらない。
- (13) 櫻庭ゆみ子「「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば——その2 陳衡哲（1）」『慶應義塾大学日吉紀要 中国研究』3、2010年。
- (14) 陳衡哲、前掲『自伝』。
- (15) “The Intercourse between China and the West in Ancient and Mediaeval Times (223.B.C.-1367 A.D.)” May 1920. シカゴ大学所蔵。
- (16) 陳衡哲、前掲『自伝』。
- (17) 注5参照。
- (18) 胡適との関係が取りざたされた短編小説＜洛綺思的問題＞の草稿を巡って胡適宛に書かれた書信を読むと、彼女が事実と虚構の取り扱いを十分心得ていたことがわかる。書信については以下を参照。「陳衡哲信、片六十七通」『胡適遺稿及秘蔵書信』第36冊、黄山書社、1994年、該当の書信は同書の105頁-119頁。
- (19) 陳衡哲の小説への早い時期の評価として錢杏邨による「關於陳衡哲創作的考察」（1929年作、のち黃人影編『当代中号女作家論』（上海光華書局、1933、所収）がある。
- (20) 「改暦法議」『東方雜誌』第9巻第2号。
- (21) 「来因女士伝」『留美学生季報』第2巻第3号（1915年3月）。
- (22) 梁啓超「近世第一女傑羅欄夫人伝」『新民叢報』第17、18号（光緒28年9月1日、15日）。
- (23) ヴァッサー女子大のカリキュラム及び当時の状況は以下参照。Mabel Newcomer. *A century of higher education for American women*. New York: Harper, 1959.
- (24) “The Atlantic Monthly” II5 (March1915): 367-76.
- (25) 注7参照。
- (26) 同上。
- (27) 李丹「胡適：漢英詩互訳、英語詩与白話詩的写作」『文学評論』2006年4月。
- (28) 朱自清、1932年10月14日の日記『朱自清全集9』江蘇教育出版社。

- (29) 松崎欣一『語り手としての福澤諭吉』慶応大学出版会、2005年、「まえがき」。
- (30) 『科学』1917年第3巻。
- (31) これについては後に稿を改めて述べたい。
- (32) 櫻庭、前掲論文。
- (33) 『新青年』第5巻第4号、1918年10月。ちなみに1920年10月『新青年』に発表された小説「波児」の執筆は、「老夫婦」より早い時期だったらしい。（『小雨点』自序）。
- (34) 『婦女雑誌』1918年第4巻第3期。
- (35) 陳衡哲、前掲『小雨点』。
- (36) 『努力週報』第42期（1923年3月）。
- (37) “A glimpse of Chinese Poetry.” *Vassar Miscellany Monthly* (1916.11), “The Early Chinese Poetry.” *Vassar Miscellany Monthly*. Alumni, Zen, 1919. Special Collections, Vassar College Libraries., 櫻庭、前掲論文注11。
- (38) 初出不明。『西風』上海古籍出版社（1997年）所収。
- (39) 宇靖程、前掲論文。
- (40) 『任鴻雋 陳衡哲 家書』商務印書館2007年、226頁。
- (41) 王桂梅「＜新青年＞中的女性話語空白」『文学評論』2004年1月。
- (42) 陳衡哲、前掲『自伝』。
- (43) 胡適『嘗詩集』「自序」亜東図書館増訂4版、1922年。引用の該当箇所邦訳は以下の通り。「纏足をした足をほどいた女性が一年ごとに広げた靴型を見ると、一年ごとに靴型が広がったことは確かでも、それには常に纏足時代の血なまぐさい臭いがついて回る」。
- (44) 陳平原「那些人永远感怀的风雅——任鸿雋、陈衡哲以及“我的朋友胡适之”」『书城』2008年4月。
- (45) 宇靖程「敬懷莎菲女士陳衡哲教授」『伝記文学』第34巻第6期、第35巻第1期～3期。
- (46) 『任以都先生訪問紀錄』中央研究院近代史研究所、1993年。

付録

陳衡哲著作目録（続）

（「？」は掲載誌および発表月が不明のもの、「：」以下は備考）

1924. 01 <西洋史>上 商務院書館。
- 07 <運河與揚子江>《東方雜誌》第21巻第13号。
- 08 <国家教育與国際教育>：（執筆）
- 09 <西風>《東方雜誌》第21巻第17号：童話
- 10 <洛綺思的問題>《小説月報》第15巻第10号。
- 06 <鷄鳴寺看月出>《文学旬刊》第39期。：白話詩
- 09 <雨中的草木>《文学旬刊》第46期。：白話詩

- 10 <秋虫與胡蝶>《文学旬刊》第52期。：寓話
1925. ? <歴史教学與人類前途>《晨報周年紀念增刊》第7期。
- 09 <一個改良大學教育的提議>《現代評論》第2卷第39期。
- 12 <南京與北京>《現代評論》第一週年紀念增刊号。
1926. 01 1 《文芸復興小史》商務印書館1926.1。
- 02 《西洋史》下 商務院書館。
- 06 <亞波拉與愛洛綺絲>：(執筆)
- 08 <北戴河一周遊記>：(執筆)
- 12 <一支扣針的故事>《現代評論》第106期。
- ? <我为什么贊成愛國中學？>《晨報副鐫》第60期。
- ? <歴史教学與人類前途>《晨報七週紀念增刊》1926 ?。
1927. 01 <婦女與職業—婦女問題一>《現代評論》第二週年紀念增刊号。
- 05 <《西洋史》六版序>。
- 08 <太平洋國交會議記略>：6月21日執筆。ホノルルで開催の第二回太平洋國際学会に出席。
1928. 04 <小雨天>上海新月出版社。
1929. 11 <西洋史>第7刷 商務院書館。
1930. 04 <欧州文芸復興小史>商務院書館。
1931. 03 <說過渡時代——為<大公報>三十周年紀念專刊作>。
陳衡哲編集《Symposium on Chinese Culture》。
- 09 <老柏與薔薇>《北斗》創刊号。
1932. 05 <掀天動地的蘇俄革命（書評）>《獨立評論》第2号。
- 06 <赤色麵包（新書紹介）>《獨立評論》第5号。
- 07 <論阿片與公賣>《獨立評論》第8号。
<中國文化的崩潰（新書紹介）>《獨立評論》第10号。
- 08 <適應環境與改造環境> ?
<閱与“暴風雨中的七個女性”——陳衡哲先生到丁玲的信> ?
<答一個少年女朋友>《獨立評論》第13号。
- 09 ~ 12 <再游北戴河> ?
<說中年> ?
- 10 <皮爾德的美国文化史>《獨立評論》第20号。
<人才與政治>《獨立評論》第29号。
- 12 <小婦人（新書紹介）>《獨立評論》第30号。：翻譯についての批評
<女子教育的根本問題>《獨立評論》第32号。
1933. 02 <岐路（書評）>《獨立評論》第39号。：曹寶麟の「問題小説」評
- 03 <國難與知識界的婦女>《獨立評論》第41号。
- 04 <居里夫人（Madame Curie）>《獨立評論》第44号。
<亞丹女士（Jane Adams）>《獨立評論》第47号。：散文集所収のものと異同あり

- 05 <清華大學與國恥>《獨立評論》第50號。
 <定鼎農村中見到的平教會事業>《獨立評論》第51號。
- 07 <太平洋國際學會>《獨立評論》第61號。
- 11 <回到母校去>《獨立評論》第77號。
- 12 <重游北美的幾點感想——在燕京大學演講>
 《西風》商務院書館：(短編小說集)
1934. 01 *The Chinese Women and other four essays, second edition Peiping*
 03 <對於兒童教育的一個意見>《獨立評論》第91號。
 04 <好妻子>《獨立評論》《獨立評論》第94號。
 <婦女問題的根本談>《獨立評論》第97號。
 05 <對於秦氏全家自殺的意見>《獨立評論》第101號。
 <所謂「日本和平」> ?
 <「日本和平」的又一個看法>《獨立評論》第102號。
 07 <哀悼居里夫人>《獨立評論》第109號。
 07 <從北平飛到太原>《獨立評論》第110號。
 09 <教育與知識>《獨立評論》第117號。
 <國家教育與國際教育> ?
 10 <小伙子、現在怎樣呢？(書評)>《獨立評論》第123號。
 11 <法律能維持情感嗎？>《獨立評論》第127號。
 <兩性問題與社會意識>《獨立評論》第128號。
1935. 01 <新中國女子的五年計畫>《獨立評論》第137號。
 <海波的歌>《新文學》第1卷第1期。
- 01 <紀念一位老姑母>《東方雜誌》第32卷第1號。：同號任鴻雋<怎樣離開四川>
 ? <青年的健康問題> ?
- 02 <居里夫婦合伝訳本紹介語>《獨立評論》第139號。
 ? <一個理想的生活>《長城》第2卷第2期。
- 03 <「父母之命」與自由結婚>《獨立評論》第142號。
 ? <復古與獨裁勢力下婦女的立場> ?
- 04 <一個小小調查表的緣起>《獨立評論》第145號
 04 <關於「父母之命」的一段談話>《獨立評論》第148號。
 05 <調查小學兒童健康的結果>《獨立評論》第151號。
 06 <心理健康與民族的活力>《獨立評論》第154號。
 <我們走的是那一條路？>《獨立評論》第157號。
- 07 <介紹兩種青年的讀品>《獨立評論》第158號。：<浙江青年月刊>
 と<中國著名故事>の紹介
 <閔與女子教育的幾句話>《獨立評論》第161號。
- 09 <救救中學生>《獨立評論》第170號。
 Chen Nanhua (陳南華) *Autobiography of A Chinese Young Girl* 北

- 平出版。
1936. 01 <説好名>《婦女文化》第1巻第1期。
<小雨点>再版、商務印書館。
- 03 <川行瑣記>《獨立評論》第190号。
- 04 <川行瑣記（二）四川の「二雲」>《獨立評論》第195号。
- 06 <川行瑣記（三）成都の春>《獨立評論》第207号。：同号に周作人
<国語與漢字>
- 08 <川行瑣記（四）帰途>《獨立評論》第216号。
- ? <新生活與婦女解放>《婦女新生活月刊》1936年第5期。
- ? <新生活與婦女解放（続前）>《婦女新生活月刊》1936年第6期。
- ? <新生活與婦女解放（続前）>《婦女新生活月刊》1936年第7期。
- ? <新生活與婦女解放（続前）>《婦女新生活月刊》1936年第8期。
- 09 <環境與天才の關係——一個寓言> ?
- 11 <婦女参政問題の實際方面>《獨立評論》第225号。
- 12 <三個朋友>執筆、胡適に見せる)
1937. ? <贈某女士>《奔涛》1937年第1期。
<一百五十年来欧洲の國際戦争>《浙江青年》第3巻第7期。
<新生活與婦女解放>《婦女新生活月刊》第5期。
<新生活與婦女解放（続前）>《婦女新生活月刊》第6期。
<新生活與婦女解放（続前）>《婦女新生活月刊》第7期。
- 03 <重丹女士小伝（1860-1935）——一位救世者的人格>
- 春 <新生活與婦女解放>出版：葉楚傖主編《新生活叢書》のひとつ
- 04 <做官與做事>《獨立評論》復刊、第230号。
- 05 <青年的修養問題——天津”青年生活指導周”講演原稿>《獨立評論》第235号。
- 08 <婦女在戰時の責任>《抗戰半月刊》第5期。
- ? <我幼時求學の經過——紀念我的舅舅庄思線緘先生>《宇宙風》 ?
1938. ? <婦女問題隨筆>《宇宙風》第68期。
- ? <国難所奠定の復興基石>《半月文摘》1938年第2巻第3期。
- 12 <衡哲散文集>（上下）開明書店。
1939. 06 <小雨点>第4再版 商務印書館。
西南連合大学講演 “読書の方法”。
1943. 09 <談教育問題>《文芸月刊》第1巻第5期。
1944. 04.15 “I Saw War in HongKong” Vassar Alumni Magazine pp.4-8。
- 09 <談乱世文人>《文芸周刊》第9期。
(<現代女作家書簡>《風雨談》11期。
1945. ? <寄自重慶>《平論》第4期。
- ? <健康第一>《時兆月報》第4巻第9期。
- ? <論死的積極意義>《平論》第6期。

- ？ <自伝（転載）>《婦女新運》第7卷第9期。
- ？ <関与婦女的希望與憂慮>《平論》第9期。
1946. ？ <説好名>《婦女文化》創刊号。
- ？ <対太平洋国交討論会的感想>《新紀元周報》第1卷第3期。
- 11 <客座記言一 你是不是基督教徒？>《觀察》第1卷第11期。：於米国
ケンブリッジ
<客座記言二 西方人〈回到宗教去〉的意義>《觀察》第1卷第13
期。
1947. ？ <美国家庭素描（通訊）>《世界月刊》1947年第1卷第6期。
- 03 <客座記言三 「主敬」是迂拙嗎？>《觀察》第2卷第3期。
- <客座記言四 民主園中的嘉木與惡草>《觀察》第2卷第5期。
- 05 <客座記言五 平衡生活的一個方案>《觀察》第2卷第10期。：同号
に楊絳訳ゴールドスミスの手紙「隋鉄大少回家」
<通信 関于自由思想分子>《觀察》第2卷第12期。：儲安平への手
紙
- 09 <写在『為中国的農業試探一条出路』的前面>《觀察》第3卷第3
期。
- 4.04 第4卷第8期に楊絳<聽話的芸術>)
1961. 11 哀詞4首：旧詩。
1962. 07 <任叔永不朽>。

陳衡哲 著 訳目録『慶應義塾大学日吉紀要 中国研究3』 補遺

- 1915.09 <来因女士傳>《留美学生季報》第2卷第3号：文言文
- 1916.09抄訳《大西洋月報》バードランド・ラッセル著 “Is A Permanent Peace Possible?”
1917. ？ <説行星軌道>《科学》第3卷。：文言文。
1919. 03 <松樓雜記>。：文言文
1920. 05 “The Intercourse between China and the West in ancient and Mediaeval Times(223.B.C-1367A.D)”。：シカゴ大学大学院提出の修士論文